ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討
A Re-examination of Han-style Tombs in Vietnam through the Olov Janse Collection (1938-1940)

宮本一夫・俵 寛司

①調査の経過と目的
②墓葬出土陶器
③陶器の型式学的検討と年代観
④漢墓出土銅器
⑤漢墓出土銅器・鉄器
⑥漢墓の墓室構造の変遷
⑦まとめ

【論文要旨】
ベトナム漢墓ヤンセ第3次調査による墓葬单位の一括過物の比較から、灰釉壷と灰陶壷を中心に型式差を捉え、フーヴォック、マントン1A・1B号塚、ゴックアム1号塚、ピムソン2号塚、ピムソン3号塚、ピムソン7号塚、ピムソン10号塚といった変遷を想定した。さらに観和二年（A.D.141年）鉄火壷、嘉平三年（A.D.178年）記年鉄火壷出土灰陶壷、広州漢墓580号墓陶器の型式学的な比較から、これらの漢墓が2世紀前半から3世紀前半にかけてのものであることを考え、この段階の詳細な年代観を確立することができた。さらに、陶器陶具に共伴する銅鉄の型式変化や粗斬り化は、陶器殻にに対応しており、陶器殻の正常性を保証するものとなった。
さらにマントン1A号墳を中心とした陶器容器の年代観も陶器殻年と矛盾するものではなかった。こうしたベトナム漢墓の編年の確立は、漢の郡治の作られて以降にみられる在地文化の変容や漢の支配構造を考える上で基礎的な年代観であると言えよう。
さて、灰釉陶壷にみられるベトナム北部から南中国までの共通性、さらには青銅容器や青銅鏡におけるこうした地域での共通性は、これらの地域を共通とした流通圏あるいは共通のイデオロギーが存在したことを示している。さらにベトナム漢墓から出土する青銅容器や灰釉陶は、ベトナム北部において独自の生産体系が構築されていた可能性が高い。また、墓室構造の変遷を認められることに、2世紀中葉から3世紀にかけて認められる壷頂多室墓と後室墓の組み合わせはベトナム北部では在地的発展したものである。2世紀後葉にはベトナム北部安南郡・九真郡・合浦郡・南海郡を中心とした士族政権が漢王朝から独立して成立し、その版図を南中国（閩南地方）にまで広げてゆく。士族政権の成立は、ベトナム北部から南中国の共通した文化圏と、墓室構造や陶器陶具にみられるベトナム固有の地域性の確立が、その背景にあると考えられる。

123